

# 琉球大学学術リポジトリ

内なることばを培い、  
くつながらを育む授業づくり  
— 琉歌創作指導の可能性を探る —

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2023-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 名富, 綾乃 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002019883">https://doi.org/10.24564/0002019883</a>

## 内なることばを培い、〈つながり〉を育む授業づくり

### —琉歌創作指導の可能性を探る—

The creation of classes to cultivate student's inner language and interpersonal connections.

-An exploration of the possibilities of teaching traditional Ryukyu poetry composition.-

名富 綾乃

Ayano NATOMI

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・浦添市立浦西中学校

#### 1. テーマ設定の理由

日々の授業において、どの生徒も主体的に生き生きと学習に取り組む姿が見られることを望んでいる。しかし実際の教室の中の生徒は、孤立していたり、学習に対して諦めを感じていたり、自分の内にある思いを表現することなく沈黙を選んだりなどといった姿を見ることが多い。このような課題を抱える生徒の心の内を引き出し、思いを受け止め、かれらが意欲を持って学習に臨むことのできる授業づくりができないものか試行錯誤を重ねている。そのような中、思いがけず、普段の学習には乗り気でない生徒や、不登校傾向のある生徒も、意欲的に課題に取り組む場面が見られたことがあった。それは、琉歌の創作学習であった。

沖縄県は『わかる授業 support guide』のはじめに、郷土学習について「人生の節々で、どこにいても無意識のうちに思い起こされ、心の支えとして働くものと考え。」と、郷土に関する学びが、子どもたちの「心の拠り所」「心の支え」となることを示している。

琉歌学習で、普段は心を閉ざしがちであったり、授業に参加することを拒んだりする生徒たちが学習に乗ってきたのは、創作活動のなかで、自分の思いを表現しても良いという「安心感」を感じ、琉歌を学ぶことで、様々な〈つながり〉を感じたからではないか。そこで本研究では、郷土の伝統的な言語文化である琉歌の鑑賞から創作への学習の可能性を探り、「自分の内側にある思い」を表現する力を培い、土地や歴史、祖先や家族、友だちなどとの〈つながり〉を育む単元を提案する。

#### 2. 研究方法

古典文学教育論や、地域の伝統的な言語文化の学び論、韻文の創作指導論などの先行研究の論点を踏まえ、自分とのつながりを実感できる教材開発を行ってテキストを作成し、作品発表や鑑賞会の場などを工夫して、琉歌学習の可能性を明らかにする。

#### 3. 先行研究について

##### (1) 古典文学教育論

古典文学の教育について、益田勝実(1967)は「自己と民族のことばの芸術の歴史、現代に生きることと前近代のことばによる想像が向き合うための教育である」として「現代人と歴史との内面的なつながり、現代人と民族の文化の伝統と内面からのつながりの実体験が可能な、唯一の教育の場」と述べている。渡辺春美(2018)は、「古典は、ことばの契機を通し、文学として機能させることで、現代を生き抜き、未来を開拓するエネルギーを得る時出現する」とする益田の論考を引用し、「学習者の積極的、主体的な読みによって個々の中に立ち上がり、意味づけられ、学習者の生活と精神を相対化し、認識、感動、

示唆、指針、反省を新たにさせ」、「古典の価値は、先験的にあるのではなく、学習者の主体的な読みによって創造的に見いだされる」とした古典観を『関係概念』としての古典観」と定義づけた。本研究では、この「関係概念」としての古典観に基づく立場に立ち、沖縄の古典文学である琉歌の鑑賞から創作に発展させる指導を構想する。

## (2) 地域の伝統的な言語文化の学び論

沖縄の伝統的な言語で綴られた古典文学に触れる機会を授業の中に取り入れることは、沖縄に生きる現代の子どもたちに、自分の内面と「祖先」や「いのち」「育った土地の自然や風土」「歴史」との〈つながり〉を体験させ、それらが「心の拠り所」「心の支え」となり自尊感情を育む基盤を強くするものとなり得ると捉えられる。益田勝実が言語を〈外言〉本位に見ることの問題点を指摘し、「ことばの根、ことばの土を養うことなしに言語教育がなされるわけがない」としていることを引用しながら、村上呂里(2019)は次のように述べている。「すなわち、学習者の〈内なることばの国〉を形成する上で、『古典遺産』＝『伝統的な言語文化』学習は大切な意味を担い、同時代の文学や生活言語と持続的に作用し、学習者の表現力を培うのです。」ここで益田や村上が述べているように、「ことばの根」を掘るという視点で沖縄のことばを取り扱うとき、生徒たちは古い沖縄のことばが古語と歴史的な「つらなり」を持っていること、それらのことばが生きる土地での人々との〈つながり〉があることを身をもって感じていくことができる。この歴史・時間という縦の軸と、地域・土地という横の軸の交差する「今」に自分が生きていることに気づいたとき、子どもたちはこの〈つながり〉のもとに自分の「命」があり、そのかけがえのなさを知り、沖縄県が「郷土の学びが子どもたちの自尊感情を高めることにつながる」と提唱することにも関わると考えられる。

## (3) 郷土教材開発と国語科カリキュラムへの位置付け

古典文学教材について益田は「根の深い、根源的な民族のつかみ直し」のために「古典はたえず発掘しつづけなければならない」と述べ、古典文学教育体系試案を示した。そのなかで「南の日本・北の日本」と項立てて、アイヌと沖縄の古典文学に出会わせることを提案している。沖縄の古典文学としてはオモロ歌謡から「天にとよむ」と「あがる三日月」を取り上げた、「南の日本・北の日本」という発想は、平成23年度の小学校国語教科書に引き継がれた。府川源一郎(2005)も「学校から言語文化を地域に降ろしていくような教育ではなく、あたらしく学校教育の内容を編み直していくような言語の教育を構想する必要がある。ことばの教育が地域の生活と密接に、また地域からも学校のことばの教育についての示唆が得られるような『国語』教育が求められている」と、地域教材を扱う学習を国語科のカリキュラムの中に位置付ける必要があると提言しており、沖縄県を「もっとも体系的にそうした作業に取り組んできた」としている。そこで今回の研究では、これまでに編まれた副読本の中から、特に琉歌について、どのような作品が採録されているか、どのような視点で指導を行おうとしてきたのかを明らかにし、鑑賞や創作の指導に活かせる教材の開発を検討する。

## 5. テキスト開発について

### (1) 既存の刊行物について

これまでに沖縄県では下記のような副教材が編纂されてきた。

- |   |   |
|---|---|
| ① | 『高校生のための古典副読本 沖縄の文学』、沖縄県高等学校障害児学校教職員組合、1970(昭和45)年、沖縄時事出版   |
| ② | 『沖縄の古典』、沖縄古典文学研究会編、1987(昭和62)年、沖縄教文出版社                      |
| ③ | 『中学校用 わかりやすい郷土の文学』、郷土の文学編集委員会編、1987(昭和62)年、沖縄時事出版           |
| ④ | 『高校生のための郷土の文学古典編』、沖縄県教育委員会、1996(平成8)年、文進印刷株式会社              |
| ⑤ | 『新編 沖縄の文学』、高教組教育資料センター、『新編 沖縄の文学』編集委員会編、2003(平成15)年、沖縄時事出版  |
| ⑥ | 『しまくとぅば読本』、「しまくとぅば読本」制作委員会編、2015(平成27)年、沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課発行 |

これらの副読本には、約130首(重複を除く)の琉歌作品が所収されている。その中から、6冊に共

通して掲載されているものに加え、次項で述べるように、中学生に願ひ・祈り・人々との〈つながり〉を想起させるものなどを18首選定した。

(2) 琉歌作品の選定

琉歌創作の指導に向けて、特に関係概念という立場に重きを置き、例えば、現在のコロナ禍にも通じる疱瘡歌（天然痘に苦しんでいた人々の思い）や、SNS上の誹謗中傷問題にも通じるような、程順則と蔡温の作品など、以下の観点で選定した。

- ① 沖縄の日常生活に根付き、中学生でもよく知っているもの 例：ていんさぐぬ花、かじゃでい風節
- ② 沖縄の歴史と結びつき、人々と心をともしるもの 例：屋嘉節、ひやみかち節
- ③ 現代人の抱える悩み、願ひ、葛藤にもつながるもの 例：疱瘡歌、程順則・蔡温の作品
- ④ 先人の想像力やものの見方・考え方の豊かさにはっとさせられるもの 例：恩納ナビ・吉屋チルの作品

(3) テキストの作成

琉歌の説明の文章を教科書の短歌や和歌の学習と関連づけて、琉歌学習を国語科のカリキュラムに位置づけられることに留意したテキストを作成した。また、それぞれの作品について、語注や大意に加え、鑑賞の助けとなるような問いを記載した。この問いは、生徒が自分自身の経験と作品に読み込まれている内容やテーマと関連づけるなどして、主体的な読みができることをねらいとした。

6. 授業の実際

作成したテキストと視覚教材を組み合わせながら、勤務校において、生徒が心の内にある思いを琉歌に乗せて表現することを目標として検証授業を行った。

(1) 単元について（表1）

期間 令和4年7月～12月（帯単元）

対象 浦添市内A中学校3年生5クラス 約150名

単元名「琉歌をつくろう」

単元の指導目標 琉歌の創作を通して、先人のものの見方、考え方に触れ、自らの思いや考えを表現する力を培うこと。

【知識及び技能】(3)【我が国の言語文化に関する事項】イ

資料「琉歌をつくろう」自作テキスト

映像資料「沖縄ロマン紀行 宮沢和史 又吉直樹”琉歌巡り旅”」NHK 2021年8月放送

主な言語活動 先人の琉歌作品に触れ、しまくとぅばを使って自作に挑戦する。

単元の流れ	
第一次	生徒による琉歌の定義づけ
第二次	琉歌作品の自分語訳
	お気に入りの琉歌を贈る
第三次	琉歌の創作
	鑑賞会

表1

(2) 授業の実際

① 琉歌との出会い

単元のはじめの感想では、「琉歌が何かわからないからできない」など、創作に前向きではない生徒が多く見られた。そこで第一時に、「ていんさぐぬ花」や「かじゃでい風節」を聴かせ、人々に親しまれている歌謡が琉歌であることを紹介した。生徒からは、「旧盆でおじいちゃんが三線を弾いていた」「結婚式で親戚が踊っていた」など、祖父母や親戚が集う機会を思い出したという声がかれ、琉歌が身近な存在であることに気づかせた。次にテキストを用い、琉歌が八八八六音で成り立っていることや、しまくとぅばの三母音の特徴などに触れた。また、古語との〈つながり〉や、短歌、和歌との共通点や違いについての説明を加えた。続いて、上記の映像資料などを活用しながら、戦後の沖縄で悲しみや絶望のなかにある人々を励まし、奮い立たせる役割を担った「屋嘉節」や「ひかみかち節」を読み、琉歌が沖縄の人々にとって、お互いの心を支えるものであったり、願ひや祈り、心の内を表現したものであることを捉えさせた。第1時のまとめとして、「沖縄の人々にとって琉歌とは…」の書き出しに続く



なちぬゆるかじうき うびいじやし  
**夏の夜 風受け 祭り思い出し**  
 コロナの終息 祈っている我

訳：(夏の夜風を受けて、祭りを思い出して、コロナの終息を、僕は祈っている。)

コロナ感染予防のために、いろんな催し物が実施されなくなりました。一人で歩く道で夜風を受けると、焼きそばの匂いや、家族で出かけた花火大会などを思い出す。早くコロナが終息してくれるよう祈りを込めて、この歌を作った。

図3 生徒作品例③

かっちゃんぬ うぐしくぬあと  
**うるま勝連の 御城の跡や**  
 どうどうとうた しがたちゆ  
**堂々と立ちよーん 姿美らさ**

訳：(うるま市勝連のお城は、堂々と立っていて、その姿が美しいなあ。)

城跡巡りが好きな父親が家族をよくドライブに連れて行って来ていた。城跡の公園で母親の用意した弁当を広げて食べるのが楽しみだった。母親はいま闘病中である。また出かけられるほど元気になってくれたらいいな。

図4 生徒作品例④

生徒Aは、授業にあまり乗り気ではないタイプであったが、琉歌の授業では徐々に変容が見られた。生徒Aの琉歌が生まれるまでのプロセスを以下の図5にあげる。このとき、生徒Aが、指導者との対話の中で父親やその友人らとの関係性を想起し、級友から共感の声をもらうことで、家族・友だち・自然などとの〈つながり〉を実感し、意欲的になっていったことが見えてくる。

生徒A作品

**夏のツーリング 海も空も美らさ**  
**エンダーもうむさ 風になゆさ**

(夏のツーリングでは海も空も美しい。エンダーも面白い。風になるようだ。)

※エンダー＝地元のハンバーガーショップA&Wの通称

生徒Aの普段の様子  
 他の生徒と私語に興味がちで、それを注意されると机の上に乗っ伏してしまう。

第一次  
 テキストの読み合わせには関心を示さず、琉歌の定義は提出をしなかった。

第二次  
 お気に入りの琉歌として「七転び転び ひやみかち起きり 我した此ぬ沖繩 世界に知らさ (何度転んでも、気合いを入れて立ち上がろう。私たちのこの沖繩を世界に知らせよう)」を選び、いつも一緒に生活指導を受けている友達にむけて、メッセージを添えて贈った。

第三次  
 唐突に指導者に話しかけてきて、右のような対話をし、創作に至った。

鑑賞会での友だちからのコメント

S1「沖繩の良いところが全部出ている、自分もツーリングに行った気分になった。」  
 S2「エンダーという言葉で、ああ、あんなに遠くまで行ったんだなと自分も一緒に連れて行ってもらえた。」  
 S3「バイクに乗ってるだけでなく降りて交流したり、風になったり、たった四行で小さな旅をさせてもらった。」

鑑賞会を終えての感想

「自分が書いた琉歌をみんながどう思っているのか楽しみで、実際に(友達の感想を)読んだらやる気が出た。」

S「沖繩の良さは、やっぱり夏の景色でしょ。」  
 T「どうしてそう思ったの？」  
 S「このあいだ海と空がめっちゃきれいで、やっぱり沖繩最高だなんて思った。」  
 T「どこの海を見たの？」  
 S「道」  
 T「道？」  
 S「そう。バイクで国道走って、海と空がきれいだった。」  
 T「バイク？まだ乗れないでしょ。」  
 S「あー、父さんにツーリング連れて言ってもらった。」  
 T「どこまで行ったの？」  
 S「辺戸」  
 T「ずいぶん遠くまでだね。疲れなかった？」  
 S「(名護の)エンダー(A&W)で休憩した。」  
 「そこで知ってる人も知らない人もおしゃべりするわけさ。そこで仲良くなるわけね。それが面白い。」  
 T「どんな話するの？」  
 S「背、伸びたな、とか、何歳なったか？とか。」  
 T「お父さんの友だちとか？」  
 S「そうそう。」  
 T「それいいね。それ書いたらいいね。」  
 S「マジ？バイクでもいい？」  
 T「いいよ。じゃバイクの良さをズバリ一言で言う？」  
 S「風になった気分。車ではできん。」  
 T「オッケー。それで締めよう。」

生徒Aと指導者との対話

図5 生徒Aの琉歌が生まれるまでのプロセスと友達のコメント

⑤鑑賞会

<各クラスでの鑑賞>

生徒の作品を紹介し、感じたことを文章にしてフィードバックする鑑賞会を行った。このとき、作品のことばや表現技法に着目して、どのような印象を受けたのかなど具体的に書くこととした。

生徒Bは学級のムードメーカーであるが、学習に乗り気でない生徒たちの私語に巻き込まれやすく、注意を受けることも多い。しかし本単元では創作の時間を心待ちにしている様子が見られ周囲に流されることなく、最終的に作品を三つほど提出した。そのうちの一つは「先生へ」と題して詠んだ。実際の生徒Bの作品とそれに対する鑑賞文は図6の通りである。

鑑賞会ではタブレットを活用して、全員が電子黒板に投影された一つの作品に対してロイロノートの提出箱にコメントを送る方法にした。提出されたコメントはすぐに電子黒板で紹介することができるので、その場でそれぞれの作品の良さを共有することができる。この活動は、まだ創作できていない生徒への参考にもなり、すでに作品を仕上げた生徒も二作目、三作目に挑戦するなど、創作意欲の喚起につながった。

<学年全体での鑑賞会とふりかえり> (令和4年12月2日 A中学校体育館)

総合的な学習の時間の一環として、学年全体が一堂に会し、各クラスで行われた鑑賞会の様子を伝えながら、それぞれの代表作品を紹介する時間を設けた。教師はファシリテーター役となり、次のように行った。各クラスの代表作品をスクリーンに映し出す→全員で音読する→作者の生徒が創作に込めた思いなどについて語る→鑑賞文を数名発表する→それに応じて作者が感想を述べる→教師が「あなたにとって琉歌とは？」と問い、作者が琉歌の定義を発表する→5クラスの発表のあと、全員が琉歌の定義を書く。そのうちの一人である生徒Cとのやりとりを以下に挙げる。

生徒B作品

わじゅんとうちわじゅん うむさんとうちうむさん  
ぬーがわんびけー うりやわんぬたみ

訳：(先生は、叱るときは叱る。面白いときは面白い。なんで俺ばかり？と思うこともあるが、それは僕のためなんだろうな)

友だちからの鑑賞文

S4「日ごろのあるあるを入れていてとても共感できた！途中で、ぬーがわんびけー！？と怒りのセリフを入れていて面白いと思った！でも最後にうりやわんぬたみ、と素直に受け止めていて予想外の終わり方だった！起承転結があっけすきと思った。」

S5「うりやわんぬたみってことばは、自分のためってわかっているのに反抗したくなることに共感した。」

S6「似ている音のことばが繰り返されているのが耳に残りやすく楽しいし、ぬーがわんびけー？っていう話し言葉を入れているのも、私は思いつかなかったことなので、すごい新鮮な感じがした。自分もこういう対句みたいなものを琉歌に入れて、ただ方言を使っただけの琉歌じゃなく、耳に残りやすくリズムが楽しい琉歌を作ってみたいなと思った。」

S7「最初の二行がラップのように韻を踏んで、耳に残りやすく面白い。また三句目の少し不貞腐れている様子も共感でき、最後の句も素直なようでも、そうではない感じもして、普段は言えない複雑な気持ちを琉歌では正直に表せているようで、とてもいいなと思った。」

図6 生徒Bの作品と友だちからの鑑賞文

生徒C作品 <sup>つゆあきていなちぬち</sup> 梅雨明てい夏ぬ来ゆん <sup>か</sup> 絆プロジェクト <sup>なま</sup> ちゃーしん勝ちゅん <sup>はりーき</sup> 今から晴れるよ

訳：梅雨が明けて夏が来る。今日は「絆プロジェクト」だ。何としてでも勝つぞ。今から晴れるよ！

作品に込めた思い：「絆プロジェクト(学校行事の名称)」の日の朝の気持ちを詠みました。学級対抗大綱引きに絶対に勝ちたいと思ったけれど、空模様が怪しくなってきた、晴れてくれないと困ると思ったときのことです。」

友だちの鑑賞文：

S8「この琉歌を読んで、絆プロジェクトの日、晴れてとてもうれしかったのを思い出しました。勝ちたいという強い気持ちが伝わって、晴れにつながったのかもしれないなと思いました。」

S9「『なまから はりーき』という言葉は、天気が晴れるという意味と、勝負に勝って心が晴れるという意味を表していると思いました。」

S10「絆プロジェクトで絶対勝ちたいという気持ちが伝わりました。みんなが知ってる映画の台詞の「今から晴れるよ」を方言にしているところが面白いと思ったし、願ってる様子が思い浮かびました。私もその時は晴れるかわからなくて神頼みになったけど晴れてよかったと思いました。」

T 皆さんのコメントを聞いてどうですか？

C「この琉歌の、裏設定(「晴れる」に二つの意味を込めたこと)に気づいてくれて、マジで嬉しいです。わかっているなー、こいつって思いました。この日までは、意見がぶつかったりしてクラスがまとまらなくなったりしたけど、どうしてもここで勝って、気持ちも晴れて欲しかったので。」

T ほかにも学級ではたくさんのコメントが寄せられましたね。それらを読んでどう思いましたか。

C「みんなが僕の琉歌を読んで、感想を書いてくれたのは、とても嬉しかったです。それから、僕の、『晴れてほしい』という意見に共感してくれていたことを知って、嬉しかったです。」

T では〇〇さんにとって琉歌とは？

C「みんなの気持ちを伝える、祈り、みたいなものだと思います。」

また、他のやりとりの中で、コミュニケーションを取ることに困難を抱える生徒が、「琉歌は、自分が魅力を感じていることや、お互いの良いところを伝え合えるつながりを感じるもの」と発表した。

### ⑥生徒による琉歌の再定義

学年全体での鑑賞会の終わりに、生徒それぞれにも「あなたにとって琉歌とは」とのワークシートの質問に答えてもらったところ、生徒自身のことばで以下のような琉歌の定義づけがなされた。

- S11「普段口に出さない心の中の言葉を詰め合わせたもの」
- S12「自分の気持ちに乗せて伝えることができ、お互いの気持ちを知ることができるもの」
- S13「つくるまでの間に、自分の価値観を知ったり、変えさせてくれた大切なもの」
- S14「みんなで共感し合うことができ、相手の良さに気づき、五感を働かせて楽しめるもの」
- S15「素直なことばは相手と心がつながると教えてくれたもの」

全体的に「自分の素直な気持ちを表現できる」「共感できる」「絆を感じる」「伝え合える」「良さを認める」など鑑賞会を通じて感じたことを言葉にしたと思われる定義が並び、はじめに行った琉歌の定義づけと比べると、「自分」ということばを用いて表現した文も多く見られるようになった。

## 7. 成果と展望

### (1) テキストの開発について

琉歌の持つ八八八六音の韻律は、学習者にとって親しみやすく、(押韻の技法がラップに通じる良さと憧れを感じさせるなど)、ことばを乗せてみたいという意欲を抱かせた。また「屋嘉節」の歌詞などに見られるように、琉歌が人々を励まし合い、支え合う文化を担ったことなどを学習者自身が発見することにより、生徒の作品に平和を願うものや人々と励まし合い支え合うという琉歌観が生まれ、より明確な目的(誰に何を伝えたいのかなど)をもって創作に励む姿がみられた。また、気に入った作品を選んで誰かに贈るといった活動を取り入れることによって、作品と自分、自分と友だち、家族、地域との〈つながり〉をより深く感じ取らせることができた。テキストと生徒作品との関連は以下のとおりである。今後も、さらに学習者が〈つながり〉を実感できる琉歌の開発やテキストのアップデートに努めたい。

- ていんさぐぬ花  
「親の教えを肝に染めなさい」という内容から、生徒Bのような親や先生との〈つながり〉を想起した作品が見られた。  
例「辛さたん中で 学ぶ肝心 先生の言葉 我教たん(辛い経験から人の気持ちを学んだ。そのときの先生のことばは私を救ってくれた。)」  
また上の句と下の句が対になっている点を参考にしたものも見られた。課題に取り組まずにオセロゲームに興じていた生徒が、創作の段階で「オセロゆたさる所 ちゃーき変わりが 我ぬゆたさる所 変わらん所(オセロの良い所はすぐに色が変わる所だが、僕の良い所はすぐに心変わりしない所だ)」とユーモラスな作品を仕上げることができた。
- かぎやで風  
楽曲を聞いて、披露宴の幕開けや旧盆など、祖父母や親戚が一堂に会する場面を思い起こし、生徒作品②・④で挙げたような家族をテーマにした作品が見られた。例「うっとう生まりてい 驚きばんない 部屋んかい広がる やーにんじゅぬ笑顔(弟が生まれて、驚きがたくさんあった。部屋には家族の笑顔が広がって明るくなった。)」
- 屋嘉節  
沖縄戦を背景に生まれた琉歌を鑑賞することにより、生徒作品①のような自分の家族の戦争体験に思いを馳せたものや、現在のウクライナ情勢を憂い、平和を訴える作品が見られた。例「戦恐るさや 繰り返しならん あんさくとう戦や 我達が伝えら(戦争の恐ろしさは繰り返してはならない。だから戦争の恐ろしさは僕たちが伝えていこう)」例「君ぬ 笑い顔 もう見らん あん思いねー 涙ぬ止まん(君の笑顔をもう見られない。そう思うと涙が止まらない。)」
- 癒癒歌  
天然痘流行の終息を祈る歌を鑑賞することで、生徒作品③のように現在の新型コロナウイルス感染症の終息を願う作品も見られた。例「例年と違はん 何かうかさん やな予感すっさ あまんかい行け(例年と違って何かがおかしい。嫌な予感がするな。悪いものはあっちへ行ってくれ)」  
また「清らさ」を繰り返すスタイルをまねて、リズムを楽しみながら、自分の関心のあるオートバイについて詠んだ生徒も見られた。  
例「形も清らさ ハンドルも清らさ エンジンも清らさ バイク乗り欲さん(形も美しい、ハンドルも美しい、エンジンも美しい、そんなバイクに乗ってみたい。)」

### (2)しまくとうばとの関わり

しまくとうばについては、生徒にとって、これまでの学習の力としての優劣差がないと感じられたためか、わからないことは「わからない」、知っていることばについては自信を持って「知っている」と言える雰囲気が教室の中に生まれることとなった。自分の表現したいことを表すことばが、辞典やインターネットだけでは調べられないことに気づき、祖父母や地域の人に尋ねるなど、教室から外へ学びの場を広げていく生徒も見られた。祖先や地域との〈つながり〉とともにあるしまくとうばを用いることにより、これまで自分に注がれてきた「しまくとうば」を、様々な人物やエピソードとともに想起し、それらとの〈つながり〉を感じ取ることで、創作への意欲が喚起されたと思われる作品も多く見られた。

### (3)〈つながり〉を生み育む言語活動の場の工夫

気に入った琉歌を選び、自分語訳をする活動や、誰かに贈ることを想定して手紙を添える活動は、普段は言えない胸の内や、葛藤を表現するたすけとなった。このことは琉歌を主体的に鑑賞する意欲につ

ながり、言語文化を介して他者との関わりを豊かにする喜びを実感させ、創作活動にも意欲的に向かわせることができた。また、互いの作品について鑑賞文を書いて贈り合う活動は、互いの良さを認め合う支持的風土づくりに役立ったほか、相手の心の声を受け止め、さらにその声に対する自分の心の声を素直に、かつ言葉を尽くして表現しようとする姿がみられるようになり、最後の学年全体での鑑賞会へとつながっていった。(沖縄タイムスワラビー、2022年12月11日号掲載)

#### (4) 創作指導における対話の重要性

琉歌創作の過程で、創作の参考となりそうな作品を提示したり、学習者自身の体験を想起させたりしながら、学習者の内側にある思いが「表現するに値するもの」であると価値付ける対話を重ねることは、学習者を主体的な学びを促す上で重要である。こうした詩の創作指導における教師の働きかけについて、春日由香(2011)は、「児童が詩を創作する過程において新しい自己を発見し変容していく時に、書き手が自己の内面的な変化に無自覚であっても、教師が『今、ここ』で営まれている対話の意味について自覚的であり、書き手を賞賛し共感的に関わるならば、教師は児童詩創作指導において『対話的他者』としての役割を遂行することになる」としている。また春日は、「教師は書き手の自立的でかつ活動的な思考を促進する『対話』の内容を意味づけ、かつ、そこで生まれた詩を文化的諸領域からも価値づける力量を支柱としながら『対話的他者』であることに自覚的でなくてはならない」と指摘している。先述の生徒Aと教師の対話では、教師がまず場面の焦点化と具体化を促し、次にそのエピソードにまつわる人々や事象との〈つながり〉の想起をたすけ、最後に表現への意識を高めさせた。この対話では、始めは混沌としていた生徒が、自分の中の新しい気持ちを発見し、変容しようとしているときに、指導者が共感的に支えることで「内なることば」を引き出す役割と、琉歌の文化的領域の見通しを持って創作に至らせる役割とを担ったと言えるのではないだろうか。

#### (5) 視覚教材の活用

視覚教材として、作品にまつわる写真や、メロディーに乗せて歌われた作品の動画などを電子黒板に投影するなどしてICTの活用を取り入れた。また、昨年5月に放送されたNHKの番組で、生徒も良く知る歌手やタレントが琉歌について対話しながら考察する場面や、作品世界が映像化された場面があり、これらは生徒にとって琉歌に対するイメージをふくらませる助けとなると考え、授業の視覚教材として取り入れた。琉歌創作の際においては、それぞれのタブレットで、しまくとうばを調べるために検索サイトなどを閲覧したり、自作の琉歌にイラストや写真を添えた画像ファイルを作成したりする活動を取り入れた。このように個別に使用できる端末があることは、自分のペースで学習したり、表現の工夫をしたりという自発的な学習活動を促すことができると考える。

#### (6) 今後に向けて

しまくとうばの発音や音読の際のリズム・抑揚の取り方などについて指導者が不慣れであったため、韻律(リズム)の楽しさを実感させることが弱かった。また学習者は資料やインターネットを活用して、共通語からしまくとうばへの翻訳に挑戦していたが、それが正しい使い方なのかなどを検証することが困難であった。今後は地域人材を活用するなどして「本物」に親しみ、助言を受ける機会などを提供することも検討したい。

### <引用文献>

- 府川源一郎, 2005, 「地域言語文化の発見と創造」『国語科小学校・中学校新教材の徹底研究と授業づくり』学文社。  
 春日由香, 2011, 「対話で言葉の世界を広げる児童詩創作指導」『国語科教育』69: 67-74。  
 益田勝実, 1967, 「<現代国語>の必要とするナショナルなもの」, 『国語通信』94 (幸田国広編, 2006, 『益田勝実の仕事 5 国語教育論集成』筑摩書房所収)。  
 村上呂里・萩野教子編, 2014, 『沖縄から考える「伝統的な言語文化」の学び論』溪水社。  
 渡辺春美, 2018, 『「関係概念」に基づく古典教育の研究古典教育活性化のための基礎論として』溪水社。